1　水に囲まれた千葉県

（1）房総と鎌倉を結ぶ水上交通

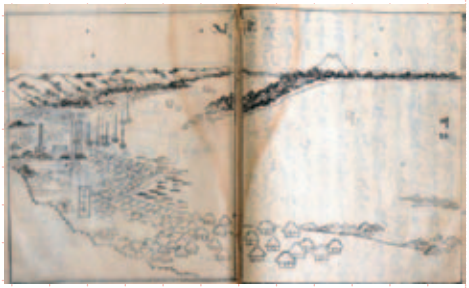
鎌倉時代の房総は，右図のように県東北部に現在の印旛沼，手賀沼などと一続きの「香取の海」，西北部に利根川・太日川が流れていました。そのころ称名寺（横浜市金沢区）の領地であった東庄の黒部村の年貢米が，香取の海に面した「おみがわの津」（香取市）から，関宿を経由して太日川を下り東京湾に入り，称名寺に向けて送り出されていました。また，東京湾の水運を利用して鎌倉の僧侶が房総と行き来したり，房総の産物が鎌倉に輸送されたりしていたと考えられています。

古代・中世の房総半島の姿
（「カシミール３Ｄ」により作成）

（2）房総と江戸を結ぶ水上交通

江戸時代のはじめ，東京湾に流れていた利根川の流れを太平洋に注ぐ工事が完成し，河口の銚子では，湊＊が整備されました。

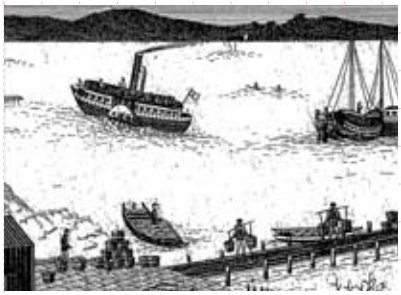
銚子湊に運ばれた物資は，湊で川船に積み替え，利根川をさかのぼり，関宿から江戸川を下り，江戸（東京）に運ばれました。



江戸時代の銚子湊の様子
宮負定雄著『下総名勝図絵』
（宮負亨氏蔵）

一方，江戸からは織物をはじめとする生活用品などが各地へ運ばれました。この時期，関西から進んだ技術が伝えられ，九十九里の地引き網による漁法や銚子のしょうゆ醸造が盛んになりました。そこで生産されたしょうゆや干鰯＊は，利根川・江戸川を利用して江戸まで運ばれ，人々の食卓を飾りました。また，東京湾では，木更津や那古（館山市）の湊から，薪炭や米，鮮魚を江戸に運んだり，房総と江戸を行き来する人々を運んだりしていました。

（3）東京湾，利根川の水上交通の衰退



利根川を行く通運丸
『日本博覧図千葉県之部初編』
のうち「浜口儀兵衛店」部分
（県立中央博物館蔵）

房総各地と江戸を結ぶ役割を果たしてきた東京湾や利根川などの水運は，明治時代前半は蒸気船「通運丸」などの就航で活気がありました。しかし，やがて鉄道が普及するにつれて次第に利用されなくなります。近年では陸上交通網が整備され，物資や旅客の輸送の多くはトラックや鉄道による陸運に代わり，水運が衰退して流通の新たな時代を迎えました。

＊用語解説）［湊］江戸時代の文献には，「湊」の字が使われています。
［干鰯］17ページ用語解説参照。